
缶蹴りのススメ

真弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

缶蹴りのススメ

【Nコード】

N4821R

【作者名】

真弥

【あらすじ】

俺の缶蹴り戦争が今始まる。

- 始まり -

大人になった多くの人間は、子供の頃、缶蹴りという遊びを学び、友人達と遊んだ。今は中学生である俺も、小学生の頃は、友人と缶蹴りでよく遊んだものだ。しかも、一度やるとなかなか面白く、空が暗くなるまでやったのを覚えている。

一応、ルールを知らない人のために説明する。ここでは、俺が知るルールのみを簡潔に説明するだけなので、やる人や、やる場所。それに地域などによつては、多少ルールが変わると言う事を予め承していてほしい。

必要な物は、缶とそれなりに広さのある公園。それに数名のプレイヤーだ。

ゲームを始める前に、ジャンケンなどで鬼を決める。これはかくれんぼや鬼ごつこと一緒だ。そして、鬼は決められた場所に缶を置く。置いた場所で目を閉じ、決められた数を大きな声で数える。その間に鬼ではないプレイヤーは隠れるのだ。

数を数え終わった鬼は、隠れたプレイヤーを捜す。しかし、缶からあまり離れては危険だ。よつて、缶から見える場所でプレイヤーを捜す。理由は後で説明する。

鬼がプレイヤーを見つけたら闘いの開始。鬼は『君、見つけ！』などと叫び、見つけた事を意思表示する。もちろん嘘をついてはいけない。暗黙のルールだ。ここまでは、ほぼかくれんぼとルールが同じだ。しかし、缶蹴りはここからが違うのである。プレイヤーを見つけた鬼は、缶のある場所まで戻り、缶を踏む。これで見つけられたプレイヤーを確保した事になる。確保されたプレイヤーは時期が来るまで何も出来ない。時期はまた後で説明する。

このゲームは、かくれんぼとは違う。よつて、見つかっただけでは終わりではない。見つけられたプレイヤーは、鬼が缶を踏むまでは負けではないのだ。そう、それが缶蹴りの醍醐味である。鬼が缶

を踏むまでに、その缶を蹴ってしまえばいいのだ。この時、確保されたプレイヤーがいた場合、そのプレイヤーは解放。つまり逃げる事が出来る。しかも蹴られた鬼は、その缶を見つけ、また元の場所へ戻さなければいけないのだ。それから振り出しに戻る。鬼が缶を戻すまでに、他のプレイヤーはまた隠れなくてはいけない。

もちろん、見つかる前に缶を蹴り、鬼を邪魔したりしてもいい。しかし、鬼が缶を踏んだにも関わらず無理矢理蹴ったり、確保されたプレイヤーが鬼を邪魔したりするのは禁止だ。

結果的に鬼の勝利条件は、缶を守ったまま、全てのプレイヤーを確保する事である。

今考えると、あれはある意味、鬼へのいじめなんだ。圧倒的に鬼が不利なゲーム。それが缶蹴りなんだ。

俺は、今回、その事実を改めて知る事になる。

俺の缶蹴りという戦いは、ある日曜日に始まった。

計画その1 状況把握

その日俺は、行く当てもなく、家の近くを彷徨っていた。何も予定がない日曜日ほど、無駄な時間はない。本当は日曜ぐらいゆつくり寝ていたかったが、朝から布団を干すからと親に起こされ、ベッドという俺の聖域から追い出されてしまった。酷い。使用者が干す必要が無いと言っているのに無視なんて。

家にいても暇なので、外で面白い事でも探そうと、家を出てから、かれこれ一時間ほど経った。未だに面白い物を発見できず、俺は近所の公園まで来ていた。

平日でも朝から老人や子供を連れた人妻などがごった返している公園なのに、今日は人気がない。不思議だなーと思い、公園に入ると、広場の中心でしゃがみこんだ子供が泣いていた。その少年の傍らには、コーヒーの缶が置いてある。

「どうしたんだい？」

俺は、少年に近づくなり、そう声をかけた。俺に気が付いた少年は顔を上げ、俺の目を見つめた。今まで泣いていたせいなのか、目は真っ赤に変色し、鼻からは大量に汁が垂れていた。

「うぐ……ぐす……缶蹴り……ずっと鬼なの……」

缶蹴りか。その単語を聞いた俺は、子供の頃の記憶を読み覚ましていた。鬼には見つかるのが早いくせに、鬼になるとすぐに全員を見つけ確保出来た。そんな俺に仲間が付けたあだ名が『鉄壁の鬼』だった。あの頃に比べ、運動能力も多少上がっているだろうし、今、鬼をやったら、きっとあの頃の自分を凌駕するのではないか。そう思った瞬間、俺の中の熱い魂に火が点いた。

鬼をやりてえ！！

いや、待てよ。しかし考えてみる。この少年が鬼と言う事は、相手もガキだ。俺がでしゃばって鬼になったら、簡単に終了してしまう。それではあまりにもガキ相手に卑怯じゃないか？ お前は普通

の人とは違うんだ。『鉄壁の鬼』なんだぞ。しかも凌駕した。

「そうなのか。君、大変かも知れないけど、頑張ってくれ」

ふう、危ない危ない。大人気ない姿を子供に見せてしまう所だった。さてと、邪魔になると困るし、ここから立ち去るか。

そう思った俺のズボンの裾を、少年が掴んだ。

「……うぐ……お兄ちゃん……助けて……お願い……」

めっちゃ哀願されてるよ！ うわぁ、参った。

「少年。俺は中学生だ。少年は小学生だろ？ ってことは相手も小学生……」

「違う……多分……お兄ちゃん……ぐす……よりも……年上」

はい？ 俺は耳を疑った。つまりあれか？ 俺よりも年上。つまり高校生とかか？ それは邪道だ。いじめに近い。いや、いじめそのものだ！

俺の中の正義感が爆発した。

「おい！ 缶蹴りしているお前ら！ 卑怯だと思わないか！？ こんな幼い小学生を相手に！」

俺は叫んだ。しかし、辺りは静まり返っている。何て奴らだ。

俺は少年を放って置く事が出来なかった。今から俺は『鉄壁の鬼』と化す。

「少年。俺が助けてやる。この『鉄壁の鬼』がな！」

「何言ってるのかわからないけど……お兄ちゃん……頑張つて」

少し殴つてやろうと思っただけ、少年の声援を受け、俺は戦いに臨む事にした。

「おい！ 選手交代だ！ 俺が鬼をやる！ 不満がある奴は出て来い！」

俺の叫びに対して、誰も発言をする奴がいなかった。晴れて俺は鬼になったのだ。

「お兄ちゃん……気を付けて……相手は三人だけど……みんな強いから」

「少年。心配するんじゃない。お兄さんのかつこいい姿を目に焼き

付けておくがいい!」

そう言って、俺は、缶の上に右足を置いた。今の俺、すっごく輝いている。

「よし! どこからでもかかって来い!」

そう大声で叫びながら俺は、ゆっくりと、缶から足を離した。

次の瞬間。缶が宙を舞った。

「え?」

あまりにも突然な出来事に、俺は唖然とした。

何が起こったのだろうか? わからない。

ただ1つ言える事は、缶を敵に飛ばされたということだ。

「お兄ちゃん……早く……缶を……」

「あ……ああ」

少年の言葉で我に戻った俺は、急いで缶を拾った。そして気が付いた。缶に何か刺さっていると言っ事を……。

「ちょっと待て。これはどういうことだ?」

俺は、缶に刺さった、手裏剣を缶から抜くと、少年に見せながら質問した。

「手裏剣だよ……知らない?」

「ああ知っているよ。知り合いに忍者がいるからな」

そう。知り合いに二人ほど忍術をマスターした人間がいる。それはどうだっていい。

「そうじゃなくて、何でその手裏剣が缶に刺さっているんだい?」

「敵の一人で、サスケって名前の人の必殺技だよ……」

「いいかい少年。まず最初に、必殺技という言葉はこの場合使わないほうがいい。いろいろ俺が怖い妄想してしまうから。理由はな、必殺技っていうのは、必ず殺す技って書くんだ。へえ、それが何か? って思つかもしれないけど、この手裏剣には読んで字の如く必殺技になりうる殺傷能力があんだよ! いや、それはこの際置いておくとして、それをそのサスケとかいう奴が投げて缶を倒した。そういう事か?」

少年は、不思議そうに頷いた。

「少年。飛び道具はあり、というルールなのかい？」

俺がそう聞くと、少年が目を見開いた。

「普通駄目なの!？」

ほう。悟ったぞ。これは勝てるはずがない。だが、そういうルールなら仕方がない。わかつた乗ってやろう。本当は乗っていけない気がするんだが。わかつた。手裏剣くらい許してやる。構うもんか。もう忍者如きで驚くもんか。

「お前達！ もう手裏剣は無駄だ！ 他の方法を使うんだな！」

そうやって、俺が缶を地面に置き、手を放した瞬間だった。

パン！！

という銃声と同時に、缶が吹っ飛んだ。

俺は呆然と缶を見送った。

「それはタイサとかいう人の必殺技で……」

「もう聞きたくない……」

何かやばいゲームに巻き込まれた気がする。

「少年。もう一つ質問していいかい？ 三人いると言ったが、もう

「人はどんな奴だい？」

「えっと……コロシアって人がいて、その人の必殺技は……ナイフ

⋮

「集合！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

計画その2 ルール確認

いろいろな場所から少年の缶蹴り相手であるプレイヤー三人が現れた。一人はいかにも忍者が着そうな装束を着た男。多分彼がサスケって奴だろう。もう一人は、迷彩服に身を包んだ男。彼がタイサト。そして、どっかの映画でエージェントが着そうな、ロングコートと、黒いサングラス。オールバックの髪型をした男、コロシヤがやってきた。

近づいてきた彼らを見て気が付いた事だが、明らかに大の大人である。いや、ただの大人ではない。四十代後半から五十前半のオヤジだ。三人とも眉間にしわを寄せ、俺を睨んでる。ちよつと怖い。

俺は、事の成り行きを彼らに聞いた。そして頭で整理していた。

「え〜つと。つまり、貴方達三人は昨日、久しぶりに同窓会で会ったと。で、サスケさん？ の家で一晚泊まった。別れを惜しみながら三人で歩いていると、少年が近寄ってきて、缶蹴りをやらないかと誘ってきた」

「そうでゴザル」

うぜ〜。この忍者うぜ〜。今時ゴザルなんてテレビの忍者でも言わないよ。

「それで、誘われた三人は、日ごろの成果を互いに見せ合うために誘いに乗り、少年と缶蹴りを始めた。」と

「そうだが。何か問題でもあるのかね？」

この大佐ムカツク！ 何だよ！ この上から見下すような発言は！！

「しかし、少年は缶蹴りのルールを知らなくて、三人が教えた。で、ルールに飛び道具ありつていうのを加える事で、三人の特技……つまり、手裏剣、スナイパーライフル、ナイフ投げを見せ合い、お互いの能力を認め合おうとした。」と

「そ〜なのよ〜。あら、何かいけなかったかしら〜？」

この殺し屋オカマかよ！！ そんな怖い顔でダークな格好してオカマ口調なんて逆に怖いよ！

まあそれはともかく、だいたい把握したぞ。まず、こんな見るからに危険な三人に、声をかけた少年が馬鹿だってことはこの際どうでもいいとして、明らかに、こいつら三人は、自分勝手に少年の缶蹴りを楽しんでいたわけだな。わかった。理解してやるよ。

「貴方達の言い分はわかりました。でももういいでしょう。少年を解放してあげてください」

この人達だって、流石に気が済んだだろう。もう子供じゃないんだし。お互いの力を見せ付けたんだろうし。

「そうでゴザルな。流石にやり過ぎた。すまぬでゴザル」

「確かに。それは悪かった」

「そおね。僕ちゃん。ごめんね」

三人は少年に頭を下げ、ちゃんと謝った。そうだよ。話せばわかるさ。

「少年。良かったな！」

俺が言うと、少年が笑顔で頷いた。

はあ、一件落着だ。今回は以外に早かったな。まあ俺の勘だと、俺の今までの流れからするとこの辺りからおかしい展開になって行くんだが、今回はそれもなさそうだ。

「しかし君の銃の腕前は凄かったでゴザル。まあ私の手裏剣ほどではなかったでゴザルが」

うん。何事もなく終わりそうだ……。

「何だと？ お前の目は節穴か？ 我輩の銃こそ最強なのだ！」

そう。何事もない……よ。

「あら。よしなさいよ二人とも。私のナイフが一番良かったに決まっているじゃない」

うわあ。喧嘩始まっちゃったよ。今のうちに逃げないと。何か嫌な予感するんだよ。

「そこまで言うのなら、もう一度勝負でゴザル」

「臨むところだ。我輩の力を見せ付けてやる」

「私だつて本気だしちゃうもん！」

……うわ。何かやばいな。

「あのゝ。僕はそろそろこの辺で……」

「何を言っているのでゴザルか？ 君は鬼でゴザルよ」

「いや、そのですね。用事が……」

「よし、配置に就け。すぐに始める！」

「あのゝ。無視しないで頂けます？」

「みんなゝ。手加減しないからね！」

完全無視じゃねえか！ このままだと、俺死んじやうよ！ 何とかしなきゃ、何とかしなきゃ！

「あの！ 待って下さい！」

俺は叫んだ。流石に三人も俺の声に耳を傾けた。三人は俺の顔を見ながら、各自の武器の手入れを始めた。

「あのですねゝ。思ったんですけど。さっき見てたらですね、三人の技ってというか武器の能力ってというか、それらは均一なんだと思うんですよ」

俺がそう言くと、三人はキョトンとした顔をした。

「そうでゴザルか？」

忍者がそう言いながら、他の二人と顔を見合わせた。もう少しだ。ふと隣を見ると、まだ少年が立っていた。こいつにも手伝ってもらおう。

「……少年もそう思うよな？」

「僕は紙一重でタイサがうま……」

俺は咄嗟に少年の頸椎にチョップし、気絶させた。そして、少年の腰に手を回し、無理矢理立たせた。

「僕もそう思うよ！」

腹話術なんてお手の物だ。強いてマイナス点を挙げるなら、少年の口から出てきている泡を隠せないくらいだろうか。

「何が言いたいのだい？」

大佐が聞いた。いい感じだ。

「だから、武器を使うのは無駄かと思えます」

俺が言くと、大佐は顔を真っ赤にして反論した。

「無駄とは何だ！ 我輩とこの銃は25年前の闘い以来ずっと……」

「いやいや、そうじゃなくて！ 何と言えはいいかわかりませんが

……つまり、武器は皆さん巧いので比べられないと思うわけですよ

……それに、もしもの事があつたら危険ですし」

「大丈夫だ。我輩の命中率は100%だ。500m離れた場所からでも、君の眉間に穴を開けることが出来る」

何で標的が缶じゃなくて俺の命に変わってるんだよ！！

「それは凄いですが、僕は一般人ですし……」

「そういう甘い事を言うから弱くなるのでゴザル。忍びの世界では命を狙われるのは当たり前でゴザル」

お前の信じる世界はここにはねえよ！！

「そうかも知れませんが、やっぱり死ぬのは怖いですし……」

「だいじょぶよん。殺すときは苦しまずに殺してあげるから」

怖いよ！！ 目がマジだよ！ 血走ってるよ！ っていうかりアルだよ！！

「じゃあ質問なんですが、三人は武器にしか頼ってないんですか？」

「そんな事は断じてない！ 我輩はこの身一つで敵地に潜入したこともある」

お……いい感じいい感じ。この際、缶蹴りくらいならやってやる。でも飛び道具はまずいからな。このままこいつらを乗せれば、最悪の事態だけは避けられそうだ。

「サスケさんもコロシヤさんもですよね？」

「当たり前でゴザル」

「そうね」

「なら、ちゃんと自分の体力だけで缶蹴り勝負しましょうよ！ 一番僕の守る缶を倒した人が勝ちって事で」

そうすれば、俺にだって勝ち目がある。俺だってやるからには勝

ちたい。『鉄壁の鬼』のプライドにかけて。

「なるほどな。我輩はそれで問題ない」

「私もでゴザル」

「私もよん」

あああ、単純な人間で良かった。俺は、腕で抱えた少年を地面に捨てると、缶を陣地に置いた。さて、俺も本気を出してしまつか。

「では始めるんで、隠れてください。あ、カウントは何秒にします？」

「5秒で結構。それ以上は必要は無い」

うわあ、大佐。強気発言して、後で吠え面をかくなよ。

「わかりました。数えます」

そう言つて、俺は、缶を足で踏みながら目を瞑り、数を数えた。カウントダウンは5秒から。ゆっくり数を減らしていき、ゼロと言った瞬間、目を開いた。

さて、誰から見つけちゃうかな。

俺は缶から足を離し、改めて公園を見回した。北側には、滑り台が配置されている。その後ろには数本木が立っていて、この辺りにも隠れる事が出来る。南側には何かいろいろな文字が彫られた大きな記念碑が置かれている。この後ろにも隠れる事が出来る。さらに東側には、ブランコとトイレがある。ブランコの後ろにも木が立ち並び、隠れられる。もちろん、トイレの中も注意しなければ。最後に西側には、砂場がある。砂場を覆うように屋根があり、屋根は蔦科の植物が生い茂り、しっかりと屋根の上を確認する事が出来ない。最悪ここにも隠れる事が出来るが、見つけられたとき、降りるのは一苦労だろう。

「よし」

まずは大穴の、記念碑の裏を探そう。そう思い、それに近づこうとしたその時だった。

『ゴボゴボ』

何か音がした。振り向くと、砂場のほうから、音が聞こえた。何

だろ？　そう思った次の瞬間、地面が盛り上がり、缶に向かって何かが接近してきた。しかも凄いいスピードだ。モグラのように土の下を進んでくる何かを凝視していると、缶の手前でそれが止まった。

やばい！　そう思った時には遅かった。土から這い出してきた忍者が、缶を蹴ったのだった。

「ちよつと待て！ そんなのありかよ！」

俺は慌てて缶を拾い上げ、低位置に缶を置いた時には、既に忍者の姿はなかった。

「まずは私の先制でゴザル！」

どこからともなく、勝ち誇った忍者の聲が聞こえた。畜生！ あんなやり方ありなのかよ！ 確かに飛び道具は使っていないさ。でも、土を潜って近づいてくるなんて、普通の人が出来ない事をやるのはなしだろ……。

まあいい。もう同じ手は喰らわない。対策だつて出来る。それに、他の二人はあんな事出来ないだろう。

「くよくよするな、次だ次！」

そう。もう蹴られなければいいんだ。大丈夫！俺は『鉄壁の鬼』なんだ！

ブーン

ん？ 何だ？ 何かまた音がする。 何だろう？ だんだん近づいてくる。

『ブーーン、ブーーン、ブーーン』

ちよつと待てつて。嫌な予感がする。俺はこの音を知っている。これは大型のバイクの加速音だ！

ブー————ン!!!!!!!!

俺の前を、真っ黒な大型バイクに乗ったコロシヤが通り過ぎた。そして、案の定、缶を蹴られた。もう嫌。

「私も一回蹴ったわよん!!!」

走り去りながら、オカマが叫んだ。もうどうでもいいよ。

缶を拾い、また元に戻した俺は、大佐がどんな手を使うのか予想

した。

ジープにでも乗って出てくる。間違いない。

パタパタパタパタパタ

あゝ。なるほど。その手で来たか。

俺の頭上からゆっくりとヘリコプターが公園に近づいて来た。しかも、ただのヘリコプターではない。最初は小さい普通のものだと思っただが、徐々に近づいてくるうちに、全貌が明らかになった。広い公園が一瞬にして闇になるほどの大きさをもったヘリコプターなのだ。それは、ある程度の高度を保ち、今は俺の頭の上で浮かんではいる。ヘリコプターのドアが開くと、ロープが落ちてきた。片方は上に繋がれ、もう一方は、缶のすぐ上まで垂れ下がっている。

シュルシュルと音を立てながら、大佐が蜘蛛の様にロープを伝い降りてきて、缶を蹴ったのを、俺は何も考えずにじっと見ていた。

「ははは！ 我輩も1回目の任務完了だ！」

そう言いながら大尉は、ロープにぶら下がったまま空へ消えていった。

[illegible]

!!!

計画その3 真剣勝負

「じゃあ君はあれかね、ヘリを使うのを禁止すると言うのかね？」

「はい！ そう言ってるんです！」

はあ。マジ大変だよ。何でいちいち説明しなきゃいけないんだよ。鬱陶しい。なんでこんなにも偉そうに話が出来るのか理解できない。そもそもこいつ、タイイとか名乗っているから、自衛隊とかの大佐かと思っていたが、本当にそうなのか疑問に思ってきた。威厳があるように見えるし、自衛隊にあるような巨大なヘリコプターを使っていたから、もしかしたら本当に偉いなのかもしれないが、迷彩服のコスプレをした、ただのオッサンにも見えてくる。

「バイクも駄目なの？」

「当たり前です！」

このオカマもマジで気持ちが悪い。別にオカマは否定しないさ。人間生きていればいろいろあるし、このような人種だって存在する。それはいい。しかし、彼は、顔が悪人。格好もエーゼントっぽいし、サングラスの中に薄っすら見える目も、殺し屋の如く怖い。ギヤップがムカつくんだ。

「それに、サスケさん。缶への接近は地上から来てください」

「何故でゴザルか？」

この忍者の嘘っぽい。何か日本以外の国の人が勝手に想像した忍者像のようだ。銀さんや蛇鬼はいい。実際に凄いいし、忍者の格好をしているわけでもないのだから。でもこいつは違う。やはり忍者のコスプレをしたオッサンにしか見えない。

「いいですか？ 缶蹴りは地上の競技なのです。つまり、地中から攻めるのは禁止なんです。これは、日本缶蹴り暗黙のルール第二条の規約にあります（嘘）ので、守ってください」

「何と……そのようなルールがあるのでゴザルか？」

「はい。約八千ほどあります」

何か、すごい驚きの目で忍者に見つめられているんですけど。ねえよ？ そんなルールねえよ？ 最近のゲームでもそんな数のルールないよ？ わかってるのかな？

「では、水遁の術という水を操る術で缶を流すのは第二十条とかでゴザルか！？」

「水遁の術は第七十条です。ちなみに火遁の術は七千二百八条です」

ここまで言ったら普通嘘だって気が付くよな？ 凄く感心した目で俺を見ているんですけど……。まあいいや、騙せているなら。

「まあとりあえず皆さん、わかりましたね？」

三人のオヤジは頷いた。とりあえずもう、普通の缶蹴りが出来るだろう。やっと俺の能力を発揮する事が出来る。

これからが本番だ。

「2……1……0！ 行きますよ！」

そう言つて、俺が缶から離れた時だった。何故か目の前に忍者が現れた。馬鹿じゃないか？ 俺の足元には缶が置いてある。名前を言つて、缶を踏んでしまえば終わりだ。

「ニンジャさんみつ……え？」

目の前の忍者が三人に増えていた。あれ？ 目が疲れたのかな？ 俺は手で目を擦つて、改めて五人になった忍者を見た。あゝ、なるほどね。その手で来たか。そう思っている間に、忍者は十人に増え、俺を囲っていた。そして、時計回りに、十人の忍者が走り出した。どんどん回転が早くなっていく。

「はっはっは！ どうだ！ 私の分身の術！！ これで、どれが本物かわかるまい！！」

うわ、ムカツク。すっげえ勝ち誇った目で俺見てるよ。

「どうだ！ 手も足も出ま……」

「サスケさんみつけ！」

俺は十人の忍者を無視し、缶を踏んだ。

「ちょ……ちょっと待つてゴザル！」

「そうでゴザル！」

「それはないでゴザル！」

「ルール違反でゴザル！」

十人が一列に整列した。そして、それぞれが俺にツツコミを入れた。

「どうしました？」

俺が皮肉っぽくそう言うと、十人の忍者の抗議が始まった。

「本物を見つけないと駄目でゴザル！」

「そうでゴザル！」

「分身して混乱させる計画が台無しでゴザル！」

「そうでゴザル！」

そうだと思つたよ。本当に馬鹿な奴だ……。

「では質問ですが。実際、本当のサスケさんはどの方ですか？」

俺の質問を聞いて、目の前に並ぶ忍者全員が啞然とした顔で溜息をついた。

「何を言っているのだい？ 私が本物でゴザル！」

「何を言い出すんだ！？ 私が本物でゴザル！」

「冗談を言つな！ 私が本物でゴザル！」

「お前こそ冗談言つな！ 私が本物でゴザル！」

「冗談は顔だけにするでゴザル！ 私が本物でゴザル！」

「お前達！ いい加減にするでゴザル！ 私が本物でゴザル！」

「この詐欺師め！ 私が本物でゴザル！」

「何を言うか！ お前なんか死ね！ 私が本物でゴザル！」

「私以外の九人は嘘つきの大馬鹿やろうでゴザル！ 私こそ本物でゴザル！」

「嘘つきは私以外の九人でゴザル！ 私が本物でゴザル！」

はいはいはい。誰でもいいよ。っていうかお前達自分に対して酷い事を言っているが、その辺は面白いからいいか。

「あの〜」

『何でゴザルか！？』

うわ、すげえ。声がぴったりだ。その辺はやっぱり同じ人間なんだな。

いやいや、感心している場合じゃない。そろそろ頃合だ。

「一つ提案があるんですが、分身を解いたらいいんじゃないですか？」

『……なるほど』

そう言つて、忍者がみんな揃つて、合掌した。そして、眼を瞑り、何か怪しい呪文を唱え始めた。どこからともなく煙が上がり、忍者を包み込んだ。ゆっくり煙が消えていくと、十人いた忍者は一人になつていた。

「どうだい？ これで私が本物だと、わか……」

「サスケさんみつけ！」

そう言つて、俺は改めて缶を踏んだ。

「あー！！ インチキ！！」

「何か問題でも？」

これで俺は一人、確保した事になる。やっとだ。やっと俺の『鉄壁の鬼』の力が発揮できる。

あと二人。大尉と殺し屋だ。きつと一筋縄では行かないのは目に見えているが、きつと捕まえてやる。俺はマジだ！

俺はまるで獲物を狙う肉食獣のような目つきで、辺りを見回した。どこだ？ どこにいる？

俺が振り向いたその時、記念碑の辺りから、誰かが近づいてきた。誰かわからないが、還暦過ぎくらいのおじいちゃんだった。ゆっくり、ゆっくり、俺の方へ近づいてくるおじいちゃんの表情は、恐怖に怯えていた。近づいてきた事で気が付いたのだが、そのおじいちゃんの背後には、ぴつたりと殺し屋が張り付いている。それに気が付いた俺は、缶に近づき、それを踏もうとした。その時だった。

「動くな！！」

殺し屋が叫んだ。その声で驚いてしまった俺は、動きを止めた。やべえ、殺気を感じた。動いていたら、殺られていたかもしれない

……。

「それ以上動くと、この人の命はないわ」

そう言って、殺し屋は、おじいさんの首根にナイフを押し当てた。
「た……助けてくんろ」

おじいちゃんが、苦しそうにそう哀願した。いや、何ていうか、人質になるために生まれてきたみたいに、似合っているよ。うん。おじいちゃん、すっげえ輝いてるよ。何か目から零れてる涙も生々しいし。

「助けてくんろ。わ、わしゃ、まだ死にたくねえんだよお。あと五十年は生きてえんだよ」

えっと、見た目八十前後なんで、百三十まで生きると。すげえな。その意気込みは、関心に値するよ。

「きよ、今日は、お隣のエツコさんとカラオケ行くんじゃ」。助けてくんろ」

うわあ。この年でまだハッスルしますか。凄い生命力ですね。その意気込みは、関心できねえ。

まじかよ……。俺が何かしたら、このおじいちゃんが殺されちまうのかよ……。

俺は焦った。そして、どうしたらいいか対策を考えた。何か良い口車はないだろうか。

一歩ずつ、殺し屋が缶に近づいてきた。やばい。このオカマに缶を蹴られたら、せつかく確保した忍者も逃がしてしまう。俺は、歯を食いしばった。

っていうか、缶蹴りに勝つためにここまでするのかよ！ 俺は、目の前にいる、勝つためには手段を選ばない大人に落胆した。しかし、気を落としてばかりはいられない。俺はそんな大人と戦うために選ばれた戦士なんだ。こんな大人たちに苛められて悲しんでいた少年の為に、俺は戦うんだ。そう、俺は出来る男なんだ！

「いいんですか？」

俺の言葉に、殺し屋は足を止めた。

「何が？」

殺し屋の反応を見た俺は、話を続けた。これで説得できるかどうかは、正直運だ。

「あなたは、殺し屋さんでしょ？ たぶん推測ですが、殺し屋さん。あなたは、その職業に誇りを持っているんじゃないんですか？」

自分で言っていて、意味がわからなかった。殺しに対して誇りを持つなんて、そんなの馬鹿げているよ。

「確かに、誇りを持っているわ……」

認めちゃったよ！ やばいよやっぱこの人！ ま、まあいい。この缶蹴りが終われば、この人と二度と会うことはないだろうから。

「そうですね。誇りを持っていますよね。なのに、そうやって簡単に人を殺めていいのですか？ それが殺し屋という職業に、誇りを持っている人ですか？ 僕は殺し屋という仕事がどんなものかわかりませんが（知りたくもないが）きつと、今あなたがやるうとしていることは、あなたの殺し屋という誇りを汚す事だと思いますよ。だから、その人を解放してあげて下さい」

俺がそこまで説得すると、殺し屋は、持っていたナイフを地面に落とした、そして、人質であつたおじいさんを解放した。おじいさんは、すごい速さで公園から出て行った。

「完敗だわ、あたしの負け」

そう言つて、殺し屋は泣き出した。どうやら、俺の言葉に胸を打たれたらしい。俺は泣きじゃくる殺し屋に一言声をかけ、仕事に戻る事にした。

「殺し屋さんみつけ！」

さあ、どこからでも来い。あの林が怪しい。俺の勘はそう囁いている。そうか、そこか。そこにいるのか。ははは、あれだね。簡単だよ。俺の力を発揮すればこれくらいね。朝飯前なのさ。ほら、あの木。あの一番背の高い木の横から、迷彩服が見えているではないか。ははは。あれは大尉君ではないか。馬鹿だな。見え見えですよ。ほら、徐々に出てきちゃってますよ。迷彩柄のズボンが。俺は少し

近づいて目を凝らした。間違いない。大尉しかない。俺は笑いを堪えるのに必死だった。

「**今だ！**」

俺が注意していた方向から、そんな声が聞こえてきた。やっぱりそうか。そこにいたのか。俺は、目を離さないよう、林を見つめていた。

その瞬間、その林から迷彩服の男が飛び出してきたのだ。

十人ほど……。

「全員突撃！！！！！」

待てよ！　なに後ろで指揮してんだよ！　でもって、すっげえ偉そうに葉巻くわえてんじゃねえよ！　この公園は、丁度一年前からいから禁煙になったんだよ！　子供たちの憩いの場を汚すんじゃないよ！　　違うよ！　お前が缶蹴りやれよ！　何だよこの部下どもは！　部下も断れよ！

「行け！ 行け！ 殺せ！」

俺に目掛けて突撃する集団に対して、俺は何も出来なかった。ただ目を瞑ることしか。

次に俺が目を開けたときには、砂煙と、宙に浮かぶ缶だけが目に
入った。

「集合！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

!!!

計画その4 缶蹴り

三人を目の前に正座させた俺は、説教をしていた。もう、年の差なんて関係ない。生きるか死ぬかの戦いなのだから。

「ちよつと待て、それじゃあ、私の一番の部下を使うのは……」

「一番だろうが十番だろうがダメに決まってるだろ！」

「な、何だお前！ 大尉に向かって……」

「部下は黙ってるよ！」

「そうだぞ！ お前らは静かに……」

「てめえも黙ってるよ！」

「……すみません」

とりあえず、大尉の部下にはお帰り願ひ、俺は、普通の缶蹴りのルールを教えた。というよりも、ありとあらゆる事を想定した禁止事項を教えたのだ。

「あの、一つ質問でゴザル」

「何だい、ボケ忍者」

「ボ、ボケって。あ、あの、そのルールで、どうやって忍術を使えばいいのでゴザルか？」

「忍術を使う事が禁止なんだよ、ボケ！」

「すみません……でゴザル」

あまりにも俺が不機嫌だからなのだろうか、意外と三人とも、文句を言わない。殺し屋にいたっては、未だに泣いているし。とりあえず、ここまで説明したのだから、今度こそ『普通の』缶蹴りが出来るはずだ。ここまできて、やっと、同じ舞台に立ったという感じが。

「これで説明終わり。文句がある奴はいるか？」

三人は大きく首を左右に振った。よろしい。

「散らばれ！」

俺がそう言うと、三人は一斉に四方へ散らばった。俺は大きな声

でカウントダウンをした。

「2……1……0！ 行くぞ！」

俺が辺りを見回すと、三人の姿は見えなかった。俺は缶から数歩離れた場所で円を描くように回りながら、三人のいそうな場所を考えた。

俺は、記念碑の近くのベンチを凝視した。一見、普通のベンチのように見えるが、俺の目は誤魔化せない。ベンチの下を覗くと、何か布がぶら下がっているのがわかる。なるほど、忍者め。あのベンチの裏にぶら下がっているのだな、お前の鉢巻が見えるぞ。

「ボケ忍者見つけ！」

俺がそう叫ぶと、案の定、ベンチの下に隠れていた忍者が姿を現した。そして、身体を転がし、ベンチの下から起き上がると、缶目掛けて走り出した。きつと、身体能力的には、あいつのほうが遥かに上だが、俺と缶の距離は絶妙だった。後ろを振り向いた瞬間、俺は缶を踏む事が出来た。

「ボケ忍者確保！！！」

俺がそう叫ぶと、一步遅かったサスケが、膝を落とし、頂垂れた。次はどっちだ？ 俺は、砂場の方を凝視した。砂場の奥にある木が怪しい。俺の第六感がそう言っていた。間違いない。あそこに誰かいる。

俺がその木に一步、また一步と近づくと、誰かが鼻を吸るような音が聞こえた。その音の主は、もちろん、殺し屋だった。角度を変えてその木を見ると、やはり後ろに殺し屋がいた。

「殺し屋見つけ！」

俺は、そう叫ぶなり、急いで缶を踏みに戻った。しかし、急ぐ必要は無いのだと、殺し屋の姿を見て気が付いた。あいつ、まだ泣いてやがる。しかも、何かもう一杯一杯やないか。目やら鼻やらから、大量に液体が流れてるよ。気持ち悪い。

「殺し屋確保！！！」

やはり最後は、あいつか。俺はもう一回辺りを見回した。

俺はこの缶蹴りを始めた当初から、あいつが最後の敵になるとわかっていた。俺の「鉄壁の鬼」のカンがそう囁いていた。

最後はあの大尉だけだ！

「ザッ！！」

どこからか、地面を蹴る音が聞こえた。俺は振り向いた。俺の背後から、大尉が猛スピードで突進してきた。

「大尉見つけ！！」

俺は叫んだ。これで最後だ。俺とこいつらの戦いは終わりだ。俺は全ての力を出し切って、缶に向かって走った。俺と缶との間は約3メートル。対する大尉と缶の間には、約10メートル。距離は俺のほうが近いが、あいつには、俺に勝る身体能力がある。負けない。俺は心の中で叫んだ。

「カンッ！！」

そんな甲高い音と共に、缶が中に浮いた。俺はその缶を目で追った。ゆっくり宙を舞い、そして地面に落下した。しばらく音を立てながらバウンドし、転がった。

缶蹴りが終わったのだ。俺は目の前に立つ、その男を呆然と見詰めた。大尉は転がる缶を見つめ、そして、俺を見た。

沈黙。誰一人として言葉を発する者はいなかった。ただ一人を措いては。

「やった！！」

さっきまで、地面で寝ていた（気絶していた）少年が歓喜の声を上げた。嬉しそうに万歳をし、ぴよんぴよんと跳ねた。

「僕の勝ちだ！！」

そう。缶を蹴ったのは、この少年である。

「まだまだ我輩達は、力不足だとわかったよ」

大尉が言った。どうやら、俺との缶蹴り対決で、自分達の無力さを思い知ったらしい。

「もう一度、一から……鍛えなおすで……」
「ござる……グスッ」

忍者は泣きながら言った。せつかくの黒装束が、涙と鼻水でビシヨビシヨだ。

「そうね。ねえ、今から三人で、師匠に会いに行かない？」

殺し屋の提案に他の二人は賛同した。

「へえー。師匠なんているんだ」

「そうだ。我輩達三人には共通の師匠がある。まあ、師匠と戦った君の命など米粒ほどだ」

そんな凶暴なのか……こいつらの師匠は。そりゃそうか。大尉に忍者に殺し屋……。そんな奴らの師匠だからな。俺の背中には、じんわり冷や汗が出ていた。

「また会おう。そして、強くなった我輩達と、再戦出来る事を心待ちにしておくんだな」

冗談じゃない。もうお前らとなど会うもんか。そう心の中で呟いた。

三人の後姿を見送った後、俺は家に帰ることにした。

「ピンポーン」

インターホンの音が、家の中に響いた。俺は缶蹴りで疲れた身体を癒すため、昼寝をしていたのだが、何度も鳴る呼び出し音に起こされ、イライラとしながら、玄関に向かった。

「どなたですか？」

ドアを開けながら、俺は言った。

「よー」

銀さんだ。この人は、いつも俺に災いをもたらす。もうそんなイメージしかない。

「今日は何ですか？」

俺は目に見えるほどの嫌そうな顔で言った。

「そんな顔するなよ。今日はちょっと会わせたい奴がいてね」

銀さんは満面の笑顔で言った。誰だろうか？俺は考えた。銀さんが背後に向かって手招きすると、三人が姿を現した。

「えっ!？」

三人は俺の顔を見るなり、啞然とした顔をした。それもそのはずだ。さつきまで缶蹴りの相手をしていたのが俺なのだから。

「師匠の友達って、彼なんですか!？」

大尉が言った。

「なるほどな。あんたらの師匠って、銀さんだったのか。妙に納得だよ」

全ての武道（特に忍術）をマスターした銀さんなら、彼らの師匠でも驚かないよ俺は。

「なんだ。知り合いだったのか」

何も知らない銀さんは、俺と三人の弟子を交互に見ながら、困惑な表情をしていた。

- 終わり -

「ここはどこ？」

少年は目が覚めた。辺りを見ると、もう日が暮れて、暗くなっていた。自分の寝ていた場所を見回すと、そこが公園だとわかった。

「あれ？　なんで僕、こんな所で寝てるんだろ」

立ち上がった少年は、自分がここに寝ていた経緯を、必死に思い出そうとした。

「痛い……」

何故か後頭部が痛み出した。不幸中の幸いか、傷みと共に、少しずつ記憶が甦っていく。

「そうだ。缶蹴りをしていて、一回意識が飛んで……気が付いたら目の前に缶があったから、僕が蹴ったんだ」

少年は、缶を蹴って、自分が喜んでいた時の事を思い出した。

「その後は……」

少しずつ、確実に記憶が甦っていく。

「そうだ。あの後、あのお兄ちゃんの……」

今度は、記憶と共に頭痛の原因が思い出されていく。

「回し蹴りが飛んできて……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4821r/>

缶蹴りのススメ

2011年5月27日19時10分発行